

# 元ブラック鎮守府警備 部

パイルラスタ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

カゲプロキャラ × 艦隊これくしょん のクロスオーバーです。

『カゲプロに出演ます!!』の設定を引き継いでいます。

# 目次

## 第零章 プロローグ

きっかけは電腦ガール	1
目覚めました。組み上げ	9
この世界の在り方	16
俺とエネの進む道	20
少尉になったけど銃の弾は当たらない	25



# 第零章 プロローグ

## きつかけは電脳ガール

けたたましいサイレンの音が俺の部屋に響き渡った。

音の原因であるスマホをベットに放り投げる。

そのままパソコンの前に座る

エネ「ちよつと、もしも〜し」

エネ「無視しないでくださいよー」

ケン「無視してるわけじゃない」

ケン「で、なんでここに居んだよ」

エネ「ええーとー」

ケン「なるほど、シンタローが構ってくれないと」

エネ「そうなんですよ。ご主人、全然構ってくれないんですよー」

ケン「ここに来てもあるのはプラモデルとレトロゲーくらいだぞ」

エネ「いいんですよ、それでも」

ケン「じゃあ、アジトにでも行こうか」

外出用のウインドブレーカー＋厚手のパーカーをクローゼットから

出してスマホにイヤホンをさして右耳に着ける。

エネ「さあいきますよー！」

イヤホンからハイテンションな声が聞こえる

親に出かけると伝えてアジトへ向かう。

ケン「熱い、焼ける、焦げる」

エネ「ええ、まあそりやそうでしょうね」

エネ「こんの暑い日にそんなに重装備ですからね、  
よー」  
見てるこつちが暑くなります

閑話休題とまあアジトに着いたわけなんだが、

ケン「なあ、嫌な予感がするんだが」

エネ「奇遇ですね、実は私もです。」

ケン「じゃあ準備はいい？」

ドアノブを掴みドアを開く……

ケン「……ハッ」

ケン「いつの間に寝てたんだ、エネ起きてるか」

エネ「はいはいはい！、起きてますよ」

ケン「ここはどこだ俺たちアジトのドアを開けたよな」

周りを見渡しても六角形の部屋に壁と床全てがステンドグラスになっている  
その中に長机が一つ

ケン「シユール過ぎね」

長机に近づくと、

ケン「おおこれは」

エネ「あのく一人で盛り上がっているとこ悪いんですが

説明を読者の皆さんに」

あゝあメタイよ全く

机の上に置いてあったのは、

A V—98式 イングラム

だった知らないよって人はググってね

『パトレイバー』で出ると思うよ。

ケン「さて、これをどうしろと」

手に取ろうとすると、突然ひかりでした！

ケン「うおっ」

エネ「大丈夫ですか!?!」



目を開くと周りを機械とモニターに囲まれた狭い空間にいた。

前のモニターには、素立ちのイングラムがいて、机の上に立っているようだ。

エネ「これ、どうなってますかー！」

スピーカーから聞こえる声はずいぶんと焦っているようだ

なんとなく察した。

自分たちが非現実的な事の被害者になっていっていると言うことが

ケン「ん……これ……マニユアルかな？」

ケン「エネ、前に本があると思う！」

エネ「本！本、本んとありましたっ！」

ケン「次はなんだよ」

エネ「なんで物が触れるんですかー！」

ケン「知らんよ！とにかくそれ読めよー！」

しばらくすると俺たちはだいぶ自分の機体を動かせるようになっていた。

エネ「あ！この機体、銃がついてますよ」

ケン「ああーリボルバーカノンね。撃たないでよ」

エネ「良いじゃないですかー」

ちなみに俺のイングラムにもある。

エネがリボルバーカノンを手に取った瞬間、

波の音がした

ケン「なあ波の音、しないか」

エネ「波？ほんとですな」

波の音がした方を向くと

黒い塊が2つこっちにやってくる

ケン「なんだ？この感覚」

ケン「エネ、銃を構えろ」

エネ「えっいいんですか？」

エネ「でも変な感覚がするのは同感です」

ケン「ああ良く狙え、俺が格闘でエネが射撃。

黒い塊がはつきりと姿を現した。その瞬間、

低く重い音が轟いた。

射撃は得意だろ」

攻撃してきた敵と判断していいだろう。

ケン「エネ、撃て!!」

俺は、黒い塊に向かって突っ込む。そのまま左腕に収納されている電磁警棒を抜き出し相手に突き刺す。

引き抜きながら、もう一体の方を確認する。黒い塊が水に沈んでいるところだった。

エネ「ふうー、二発で片付いちゃいました、手応えがないですねえ」

ケン「そりあお前」

エネ「そんな事よりびっくりしましたよ」

ケン「ああ、いきなり撃ってくるからな、びっくりした」

エネ「チュートリアルですね、難易度が!」

ケン「チュートリアルって、変なこと言わないでくれ!」

ケン「なんか。また意識が・・・」

エネ「あれ。私も意しきg・・・」

へあなた方、二人でこの世界の人を運命から助けてください」

意識を失う前の俺が聞いた最後の言葉だった。

## 目覚めました。組み上げ

バカでかいサイレンの音が俺の耳を襲った。

飛び起き、音の原因を掴み

ケン「エネ、うるさい」

エネはびつくりしたようにスマホを振るわせて、どっかいった

ケン「・・・てか・・・ここどこだ？」

気を失ってから誰かがこの医務室みたいな場所に

いったい、誰が？

しばらくして、目の前のドアがゆつくりと開いた

??「起きたか？」

ケン「あ、あれ？ キド？」

キド「ああ 事情はエネから聞いている」

ケン「ちよ、ちよっと、まってくれ」

ケン「まず、後ろに居る人は？」

キド「ああ、こいつは」

??「はじめまして、五月雨と言います。

よろしくお願いします」

ケン「うん、よろしく、それで？」

五月雨「それだと言われましても」

ケン「いや、君じゃなくて 団長？」

キド「分かってる」

キド「えーとだな、つまり、あれだ」

ケン「はいー!! ゲームのなかあゝ!!」

キド「そ、そうだ」

ケン「キドの？」

キド「そうだ」

エネ「始めた理由が女子の友達がほs」

ケン「ちよ！俺のスマホ、潰さないでくれー！」

キド「うるさい!!」

エネ「それが最善策じゃないことを」

五月雨「落ち着いてください！ 司令官！」

キド「ふうー」

ケン「エネも余計なこと言うな」

エネ「わかりましたよー、スマホを潰されたら大変ですからねー」

ケン「主に俺がな」

エネ「いやいや、死んじやいますって」

キド「おまえら、これ、」

ケン「投げるなよ！」

キドが白い箱を二つこつちに投げってくる

ケン「なんだこれ」

箱を開けてみる

ケン「プラモ？ でもこれ」

エネ「どうしたんですか？」

ケン「これ、余裕に500パーツぐらいある」

エネ「へえー、多いんですか？」

ケン「うん、ガンプラのMGは300パーツぐらいかな」

エネ「多いですね」

ケン「組み立てるか」

ケン「はあ」

ケン「終わったー」

エネ「あの、3時間は長いです。」

??「夕立もそう思うっばい！」

ケン「……………ん、君は？」

??「夕立っばい！」

ケン「……………はいはい、これでもはやいぞ」



ケン「いつもなら3日はかかってるぞ」

エネ「これって、あの時乗ったやつですよ」

ケン「うん……AV-98 イングラムだな、1号機と2号機だ。この2号機はテストタイプになる前のヘッドか」

ケン「さて、キドの所に行くか」

突然、扉が開いた。

??「お邪魔するよ」

エネ「また、新しい人ですねー」

夕立「あ、時雨っぽい、なんできたっぽい？」

時雨「うん、夕立、提督が呼んでたよ」

夕立「わかったっぽい！」

時雨「二人のことも呼んでたよ」

ケン「わかった、エネ、どっち？」

エネ「こっちで！」

エネはアルフォンスを選んだ

ケン「行くか」

執務室の前についた

ケン「失礼します」

キド「やめてくれ、そういう他人行儀な感じは」

ケン「わかったよ、で？」

キド「ちよつと、五月雨と時雨、夕立と出撃してほしいんだ」

ケン「ちよ、ちよつと待ってくれ！」

ケン「説明、出撃ってなんだし、それに」

時雨と夕立を指さして

ケン「この二人がいつ来たとかさ」

エネ「そこは、スーパープリティー電脳ガールのエネちゃんにおまかせください！」

ケン「なるほど、俺が組み立ててるの遅すぎて建造してたと」  
ケン「了解した」

説明によると、日本の海がヤベー、てことらしい

エネ「そんな軽くないですよ」

ケン「わかってるよ、さあ逝くか」

エネ「漢字さん自重してー」

### 閑話休題

自分の機体に手をあてて

ケン「できる気がしないけど出撃!!」

エネ「よーです!! 行きますよー」

五月雨「抜錨ですつ」

時雨「駆逐艦 時雨 出撃するね」

夕立「駆逐艦 夕立 出撃っほい！」

## この世界の在り方

みんなで海に出ようとして機体を動かそうとしたら

ケン「つて、あれ動けない」

エネ「本当にうんともすんともいいませんねー」

ケン「五月雨と時雨、夕立だけで悪いんだけどいつてくれ」

夕立「わかったっぼいっ！ 行ってくるっぼい！」

ケン「ああ、気を付けて」

つまり、出撃は3人だけでいつてもらった。俺とエネでどうするか考えることにした。

そういえば、港から帰ってくる時に人とすれちがった。顔を隠してたけど赤いマフラーでバレバレだった

顔を隠す意味はどちらへ？

ケン「さて、どうするか」

エネ「どうしましょうね」

腕を組んで、考える

ケン「よくよく考えたらさ」

エネ「外側しか作ってないですもんねー」

夕立「なにか問題っぽい？」

ケン「内側のつていうか中身ができてないってあれ、帰ってきてたんだ」

時雨「うん、さつきね」

エネ「五月雨さんはどこ行つたんですかー」

夕立「提督さんのところっぽい！」

エネ「へーそうですかー、機体については、頭のなかはまだまだなんですよね」

時雨「なるほど、だからさつき歩けなかつたんだ」

なんとなく、ポケットの中に手を入れる。手になにかが当たった気がして取り出してみる。

手に取つたのは紙で文字が書いてあつた。

ケン「そういうこと、でさ時雨」

時雨「なんだい」

ケン「これとこれをキドに渡してきて」

エネ「ちよ、ちよつとまってください！　なんで私まで」

ケン「はい、時雨、」

時雨「わかった」

エネ「無視しないでください」

ケン「ふう」

夕立「なんで、エネまで行かせたっぼい？」

ケン「エネに会いたって人がいるからね」

夕立「そうっぼい？ よくわかんないっぼい」

ケン「ならいいんだけどね。」

しばらくすると俺のスマホを持ってキドとエネ、その後ろに2人、人がいた。

ケン「人を伝言板にするってどういうことですか。アヤノさん」

アヤノ「ごめんね、シンタローがどうしても言うから」

ケン「そうでしたか、それでなにを言いに来たんですか？」

キド「夕立、すこし席を外してくれ」

夕立「?? わかったっぼい」

キド「シンタロー」

シン「わかつてる、おまえキドからここがゲームのなかだつて聞いたらしいな」

ケン「あ、ああ」

シン「そうか、でもなここはゲームなんかじゃない。ここはれつきとした1つの世界だ」

ケン「よくわかんないけどわかった、それでこの世界ではなにが起こつてる」

シン「すこし長くなるけど聞いてくれ」

アヤノ「ケンタロー、お願い最後までしっかり聞いててね」

シンタローとアヤノさんの真剣な表情に頭のスイッチを切り替えた。

## 俺とエネの進む道

シン「さて、こつから話す話は気合いを入れて聞いてくれ」  
ケン「あ、ああ、わかつてる」

3年前に突如として海から現れた者達が人を襲い始めた。

それを人は『深海棲艦』と呼んだ。

深海棲艦には、既存の兵器は一切効果がなくシーレーンをズタズタにされてしまう。

しかし、そこに現れたのは深海棲艦と対等に戦うことのできる『艦娘』という

存在だった。

人は艦娘と手を取り合って、深海棲艦を押し返すことのできるようになり、

3年間戦い続けている。



シン「ということなんだけど」

アヤノ「ごめんね、信じられないだろうけど」

ケン「いや、信じるから良いけど、なんかまだ言いたりないって顔ですね」

アヤノ「う、うん」

ケン「それでさ、団長？」

キド「なんだ？」

ケン「俺はなにをすればいい？」

キド「うっ」

シン「あ、悪いキドにはなにも言っていないぞ」

ケン「あっそう」

シン「実はな、ここだけ、というか信用できるやつにしか伝えてないんだけどな」

シン「ブラック企業って知ってるだろ」

キド／ケン「「ああ」」

アヤノ「そのね、艦娘バージョンがあるの……」

ケン「……」

アヤノ「艦娘を集めて深海棲艦と戦つてるところを鎮守府って言うんだけどね」

ケン「それで、鎮守府でブラック企業ばりのブラックしてることね」

シン「ブラックしてるってなんだ」

シン「でも、あいつらは命をかけるからな」

アヤノ「鳴るべく助けてあげたいの、協力してほしいの」

ケン「了解した。それで俺はなにを？」

するとシンタローは紙を俺の前に出した。

シン「これに合格してもらう」

ケン「これは……海軍の入軍試験？」

アヤノ「そう、その結果しだいで入軍と階級が決まるの」

ケン「へえ、ちなみに2人の結果って？」

アヤノ「シンタローが少佐で私が少尉だったかな」

アヤノさんが言うには、下から・少尉・中尉・大尉

・少佐・中佐・大佐・少将・中将・大将・元帥

らしい

アヤノ「でも今はシンタロー、中将になっちゃて司令長官なんて仕事してるけど」

シン「不可抗力でだ、なりたくてなったんじゃない」

ケン「ちなみに、これ、いつ？」

シン「1ヶ月後」

ケン「1ヶ月？ きびしい!!」

キド「まあ、なんだ、頑張れ」

ケン「わかつてる」

アヤノ「それでね、ケンタローとねエネちゃんをね大本営につれて行きたいの」

ケン「わかりました。従います。」

シン「そういうや、エネのやつ妙に静かだな」

ガチャ 扉がゆっくり開いていく

夕立「お話終わってたっぽい？」

エネ「やつと終わりましたかー!!長過ぎて皆さんと遊んで来ちゃいましたー」

シン「エネ、おまえはしばらく俺とアヤノと一緒にだ。」

アヤノ「あつ、ケンタロー、つぼみなのとこの娘、1人選んで一緒に来てもらってね」

シン「キド、いいか？」

キド「大丈夫だ」

ケン「なら、了解」

時雨「なんの話しだい？」

吹雪「私も気になりますッ！」

ケン「俺が大本営に行くから3人の誰かと一緒に行くってこと」

夕立「なら、夕立が行くつぼい!!」

ケン「ありがとう、2人は？」

五月雨「私達は司令官と一緒にいます。頑張ってくださいね!!」

ケン「うん、頑張るよ。疲れない程度にね」

シン「じゃあ、準備して門の前まで来てくれ」

ケン「了解しました。司令長官殿」

シン「やめてくれ」

## 少尉になつたけど銃の弾は当たらない

ケン「16378……16378……おつ、あつた！」

提督試験の発表日自分の番号を発見した俺。

prrrr,ピッ

ケン「もしもし、ケンタロウです。ありました、書類貰って行きます」

??『書類はこつちにあるからそのまま帰ってきて』

ケン「執務室ですね。今行きます。アヤノさん」

アヤノ『はやくしてね』

ケン「了解」

ピッ

電話を切り、ポケットに入れて足早にその場を去った。ちなみに俺の階級は少尉だったとここに記しておく。

トントントント、ガチャ

ケン「失礼します。お待たせいたしました、司令長官補佐殿」

シントローの執務室に入って、アヤノさんに声をかける。

アヤノ「やめてよ、もう」

ケン「やめます、シントローは？」

ソファに座り、ソファの柔らかさを堪能していると扉を開く音を背中で受けた。

シントロー「早かったな」

手に持った資料に目を通しながら、俺の横を通り過ぎてアヤノさんの隣の椅子に座る。シントローの机の上には大量の書類が重なっていた。本気で30cm位ありそうだ。

ケン「暇か？」

シントロー「見えるか」

ケン「楽しそう！」

シントロー「楽しいわけあるか！」

シントローはドカッと椅子に座り直す。いやー、ここ最近勉強ばつかで疲れたんだよね。

シントローも一緒か

シントロー「合格おめでとう、と言っておく。さあ、本当の地獄はここからだ」

ケン「キャラが……ま、いつか………仕事をちようだい、暇なのは好きじゃない」

暇なのが好きじゃないのは本当だ。けどシンタロー並みに働きたいかと言われるのは俺は速攻でN.Oと答える自信がある。

アヤノ「はい、これが仕事だよ。」

席から立ち上がったアヤノさんは俺のところまで来て、資料を手渡した。

さてどれどれ、訓練指令書……………？

ケン「訓練……………」

アヤノ「そんなに残念そうにしないでよ」

ケン「いや、大丈夫。それで期間は？」

資料から目を上げ、シンタローの回答を待つ。て、なんか後ろ向いて……………あ、前向いた。

シンタロー「1週間後だ……………！」

ケン「了解！」

アヤノ「頑張つてね！」

回れ右して執務室を出る。

その足で工廠……………武器とか整備するところへ向かう。

ガラガラと音を鳴らして重たい金属の扉をゆっくり開け、1番手前の作業机に座る。それから、右腰のケースを机の上に置いて開け、イングラムを立てる。やっぱ、カッケーなイングラムは……

ピンセットでコックピットをカパッと開ける。……細かつ……もつと大きくならないかな……あつ大きくなつたけど……80cmくらいかな。まあ、やるか。OSを作るぞ

とか意気込んでいた時期が私にもありました。

なんだよ!!? 初期設定だけで十分だったぞ!!?

……楽だからいいけど、OS作れないけど!

次の日



カーン！カーン！

イングラムのリボルバーカノンが10 mくらい離れた距離にある的を撃ち抜く。

ケン「結構、当たるようになったな」

エネ「まだまだですね。10発中6発ではしよぼしよぼですよ」

ケン「そりゃあ、うん」

10発中10発当てられたら反論できん！

エネ「最初よりマシになりましたけど」

ケン「1発も当たらなかったもんね」

エネ「はい、ですが、今日で最後ですね」

ケン「頑張るよ」

イングラムを降りて、小さくしてケースに入れる。よし！時間だ。

シンタローのところ行こう。

コンコンツ

ケン「失礼します」

シン「おう、来たな。つーわけではい、頑張れ」

ドサツと資料を渡される。多くない？

ケン「さらつとしてるね。」

シン「忙しいんだ。それに早く終わらせろ」

アヤノ「ごめんね、シンタロー今、引き継ぎがあるから」

引き継ぎ？ ま、いつか

ケン「行つてきまーす」

アヤノ「夕立ちちゃん、ちゃんと連れて行つてね」

ケン「ええー、大変そう…」

アヤノ「それでも、護衛としてね」

ケン「はい」ピシッ

敬礼決めて回れ右して出る。

シン「まあー、なんだ頑張れ」

バタンツ！

陸路で電車を乗り継ぎ夕立を連れ目的地へ

来たのは良かったんだけどなー。オバケ屋敷かつての!?!?

へっ?夕立はどうしたのかだつて?走つてどっか行つた。

怖い怖すぎます……

迷子になってないよな

るわけないか。

ケン「覚悟を決めて……………コミュ症にはキツイ仕事だ」  
キイイ

音が悪意の塊だ。ふふっ怖え。